

都市でもなく メディアでもなく

粉川哲夫

一九九〇年代を最後に国家としての日本がその繁栄に終止符を打ったことは比較的よく知られているが、その後、世界の歴史のなかからどのようにして消えていったのかということ、いまでは臆測するしかない。

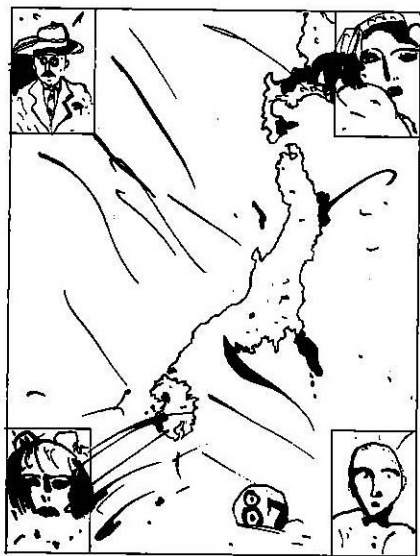
自然災害がその引き金を引いたことはまちがいない。二〇世紀末から東海地方を中心に大きな地震が頻発し、東京の高層ビルの多くが解体し、東京は首都であることをやめた。すでに世界の趨勢は、「グローバリズム」と

「分権化」へ向かっていたが、大地震による東京の解体が起こらなければ、集約と統合をほしのままにしてきた首都が地方に分散されることは決してなかっただろう。

しかし、ソ連の解体が結局はプラスに転化したように、中央集権的なシステムの解体自体は必ずしもマイナスではない。が、日本の場合は、解体をプラスの分散化に転化できるような政治家に恵まれなかった。後代の目からすると、一九九〇年代以後の日本は、あら

ゆる好機をことごとく逸したのだった。

グローバリズムは、「インターネット」や「情報スーパーハイウェイ」といった世界的なコンピュータ・ネットワーク・システムを、具体的な基盤として進められたのだったが、規模が大きくなっただけ、事故の影響も甚大だった。かつての電話にひびく地球規模のマルチメディア・ネットワークが起動しはじめた一九九九年以後、この電子ネットワーク上でしばしばトラブルが発生したが、二



日本の消滅

〇〇一年の事故（「サイバーホロコースト」とも呼ばれる）では、ネットワーク上の記録がごとごとく消失してしまい、「先進産業国」の大半が国家情報を失った。

特に日本では、国から個人にいたるまで、新しい技術を過信する傾向が強く、記録のシステムをことごとく文書によるものからデジタルのシステムに転換してしまっていたので、その被害は大きかった。その後は、遅ればせながら文書とデジタルとを併用する方法が採用されたのだが、電子テクノロジーの時代になっても文書の保存に意を用いたヨーロッパとくらべると、日本のやり方はおざなりであり、せっかく併用された記録文書も、大地震によってあつとつ間に灰燼に帰してしまった。

だが、テクノ災害と自然災害との両面パンチを食らったからといって、かつて一億数千万の人口を誇った国が人口（その大半が老人である）まばらな過疎地になり、日本人が世界に散らばってしまったのは謎と言うほかはない。わたしは、すでに三〇年以上もこの問題を研究しているが、まだ説得力のある解釈を提示できないでいる。それは、必ずしも資料が乏しいからではない。まるで、ある日ハ

メルンの笛吹き男に率いられて日本人が大挙してどこかに隠れてしまったかのように、あるいは巨大な宇宙船に乗って別の星に飛び去ってしまったかのように、歴史が突然途絶えるからである。

ひょっとすると、日本人は、あるとき、民主的な決定のもとで国家を解体し、自由意志によって世界に散らばったのかもしれない。限られた資料から推測しても、一九九〇年代以後、国は人々に失望を与えつづけたようである。そもそもこの時代には国家が無用の長物になりはじめていたのだが、日本の国家は、旧来の介入を続けただばかりか、大国ではないにもかかわらず、大国の体裁づくりに夢中だった。民間レベルではますます深まったアジア諸国との関係も、肝心のところで国がしゃりり出て、話をつまらなくするのだった。国連の常任理事国入りは、定見のない国家姿勢を露呈させ、世界の軀體を買うだけだった。

おそらく、こうした状況のなかで、人々は、このまま国に頼っていたのでは、生活の質や創造性を向上できないことに気づきはじめてのだろう。彼や彼女らは、いままでの生活に別れを告げ、まず、生活費のバカ高い日本を

離れた。最初は若い世代が中心だった日本脱出も、やがて中年層にまで及んでいき、三〇年ほどのあいだに、日本には高齢者しかいなくなってしまう。日本ではすでに二〇世紀から人口の高齢化が進んでいたもので、この変化のインパクトは大きかった。

おもしろいのは、こうして散らばった日本人たちが、年老いて余命いくばくもなくなると、必ず日本に戻ってくる不可思議な現象が見られたことである。たとえ、日本で生まれなかつた者でも、祖先が日本の出身であると、彼や彼女らは、日本で人生の最後を迎えようとした。これは、夏には祖先の霊がまつられている故郷に帰り、また、死者は生れ故郷の墓にまつられるという日本の長い習慣のためであったが、この現象は、日本を知らない人々には異様に映り、誰言うとなく日本は「墓場列島」と呼ばれるようになってしまった。

とはいえ、いまはもうそんなこともすべて忘れられている。日本について語る者はほとんどいない。ロスト・メモリー・ロスト。記憶は失われるが、歴史の痕跡はどこかに残される。しかし、その痕跡を読み解く媒介はつねに《いま》のなかにはない。